

去る2月14日、助産師・山西みな子さん（自然育児相談所所長・日本母子ケア研究会顧問）が逝去されました。東京大学医学部附属助産婦学校卒業後、社会保険中央総合病院婦長などを歴任され、1983年の自然育児相談所開設後は「総合母乳育児（Total Breast Feeding）」を提唱し、「飲めるように飲ませる」ために日々母子に寄り添うケアを実践されました。また、小社看護セミナーや小誌連載「母乳育児支援 基本と看護の実際」など、精力的に講演・執筆活動にもいそがまれました。ここに、謹んで哀悼の意を表します。（看護の理念「看護のこころ」は本誌巻頭に掲載しています。）



山西先生を偲んで

日本母子ケア研究会代表・福岡県立大学教授 松原まなみ

日本の母乳育児支援の源流を築いた助産師界の偉人、山西みな子先生がお亡くなりになられた。享年69歳。早すぎる死である。晩年、肝臓を病まれ、入退院を繰り返しながらも、講演活動に全国を奔走し、亡くなる前日まで母乳育児相談をつづけられていた。卓越した臨床眼と、触れられていることさえ感じさせない乳房治療の技……。氏の手によって癒され、子育てに力を取り戻した母子はどれほどの数に上ったであろうか。

氏がわれわれ看護職に教え、伝えようとしたものは数々あるが、最も重要なものは「赤ちゃんから学ぶ母乳育児」の概念である。「母乳を嫌がったり、泣き叫んだり……。母親が育てにくいと感じる子どものしぐさは食物に原因があることが多い。母子双方のからだに触れ、乳房の状態、母乳の質、授乳時の母子の様子を観察するとその原因が見えてくる。触れることでリラクゼーションが図られ、母乳育児は楽になる」「看護観察、看護診断、看護治療は別物ではない、『診断即治療である』」と教えられた。

氏はその著書『母乳育児の看護学』（メディカ出版刊、

2003年）の中で、「まず、『からだの生理状態を把握すること』そして『生命の法則』『健康の法則』に則り、そのいのちが、『生きるように援助する』こと」と、生理学に依拠した診断の重要性を説いている。「赤ちゃんは、自ら生きようとする力、正しい方向に成長しようとする力を持って生まれてくる。しかし、現代社会にはその道筋を阻むものが多数存在する」として、過剰な人工乳や蛋白食品、食品添加物の摂取に警告を発し、母乳育児を中核に据えた自然育児法を提唱された。いまでこそ、蛋白食品と食物アレルギーの関係が認知されるようになったものの、氏が母乳と食物アレルギー、授乳中の食事指導を実践し始めた1980年代には医師からの批判が強く、そのために看護専門誌の連載記事が中断させられたり、地域母子保健功労者としての表彰に横槍が入ったりと、先駆者であったが故に多難の人生であったことも記載しておかねばなるまい。

氏は、自らが提唱する、授乳中の母子の反応性（母子間で起こる心とからだの相互作用）を基軸として行う母乳育児支援を「Total Breast Feeding：総合母乳育

児」と名づけ、全国の助産師、看護師に伝えていかれた。この考えを形づくった基礎には、故桶谷そとみ氏の示した「母子一体性の原理」とともに、ナイチンゲールの看護論があった。氏は『母乳育児の看護学』の中で、さらにこうつづけている。「ナイチンゲールは『自然が健康を回復させたり、維持したりするものである』として、人にとっての環境の重要性を示した。そして『病気や傷害を予防したり、癒したりするのに最もよい条件に生命をおくこと』、そのための『生きる手助けをすること』が看護である」と。本誌巻頭に掲載された『看護のこころ』には、まさに、氏がその一生をかけて実践されてきた看護の理念が凝縮され

ている。

氏には、目の前にある現象を的確に捉え、そこに潜む事実の関係性を見極める鋭い洞察力があった。さらに、その現象の意味を既存の学問体系を基礎に明確化し、物事の理として示すことのできる達人であった。われわれには見てとれない真実を見極める眼。真理を言い当てた言葉の数々。凡人の私が含蓄深い山西語録を語り継ぐためには、まだまだたくさん聞きたいことがあった。誰にも真似できない独特の語りで生々生理をさらりと語る氏のご講演を聞くことができなくなったのは痛傷の極みである。ここにご冥福をお祈りする。

ご遺志「助産婦に誇りを！ 技を！」の継承を願って

山西先生、お疲れさまでした。「助産婦は生涯現役。私には伝えたいことが山ほどある。いままで培ってきた助産婦としての技と心を、ぜひたくさんの若い助産婦さんたちに伝承してもらいたい。そのためにも、まずは後継者づくりに力を入れませんか。応援してくださいね」と、いきいきと話されていたお姿を懐かしく思い出します。

先生との最初の出会いは、1980年1月に当社が開催いたしました「80年代 これからの保健指導」セミナーで、故桶谷そとみ先生の名代として「桶谷式乳房治療手技の理論と実践」をテーマにご登壇くださいました。当時はたいへんな桶谷ブームで、桶谷式を知らずば助産婦にあらず、の風潮がありましたので、このセミナーはたいへん画期的な取り組みとして一大旋風を巻き起こしました。しかしながら功罪（皆が「神の手」になれるわけではありません）も取り沙汰され始めてきているときでもあり、科学的にはどうなのかという観点からも検証されねばならない難しいセッション、行司役を務めてくださいましたのは、現在法務大臣であられ、このたび第1回ヘルシー・ソサエティ・アワード（健康や福祉をめぐる

社会活動を表彰）を受賞された南野知恵子先生でした。その折の山西先生のご講演「母乳哺育は助産婦の手で」の素晴らしさ、卓抜な論を展開しながらのお話は、25年が過ぎたいまもなお、圧倒的だったという印象があります。

ある日、「とても素晴らしい子が見つかった。これから彼女を私の後継者として育て上げますから、どうか楽しみにしててください」と嬉しそうなお電話をいただいたことがありました。それから15年を経て堂々の看護大学教授・松原まなみ先生が誕生されたことは、山西先生のご慧眼と人育ての情熱にほかならなかったのではないかと感じています。

奇しくも今年2月の東京セミナーが、山西先生とのお別れの日と重なりました。病をおしてまで伝えようとしてこられた「助産婦に誇りを！ 技を！」のご遺志は、ご薫陶を受けられた松原先生はじめ門下の先生がたにバトンを渡され、今後も確実に継承されていくことでしょう。ご冥福を心よりお祈りいたします。

株式会社メディカ出版 代表取締役 長谷川 素美